

京都芸術 センター 通信

KYOTO ART CENTER
NEWSLETTER

July 2018
Vol.218

発行 | 京都芸術センター
2018年6月20日

07



山内

山内朋樹作庭「鹿と子の庭」

池田朋樹・ 剛介

現代美術作家の池田剛介と美学や庭園史を専門とする山内朋樹が、先駆的な造園を多く手掛けた7代目植治、小川治兵衛作の庭をリサーチします。植治の庭と京都の近代化の関係に興味を持ったという池田、研究活動と並行して自身も庭師として活躍する山内。本プロジェクトでは、一般の参加者を募集し、秋以降、3回の対話型フィールドワークを予定しています。植治の庭を構成する多種多様な要素を実際に見ながら、対話を通じて新たな鑑賞の仕方を模索します。



渡邊

渡邊朋也(“Hello” from or for supermarkets) (2017)
撮影：山中慎太郎(Qsyum!)

朋也

メディアテクノロジーをベースに作品を制作してきた渡邊朋也は、コンピューターの情報量の単位である「ビット」に注目し、グループリサーチを提案。1バイトの情報量とは、8桁の2進数8ビットで表すことができます。本リサーチで渡邊は、京都という都市の中において、この8ビットの情報を記録できる媒体を、参加者と一緒に数多く見つけ出そうと試みます。例えば、スーパーで見かける8粒入りのガムなどがこれに該当するのです。このように身近なところに存在する8ビットについて、スーパーから世界遺産まで探索範囲を拡張しながら、都市へ言語パターンを埋め込む可能性を探ります。情報伝達の無限のポテンシャルについて、一緒に考えてみませんか。

Co-programカテゴリCは上演や作品発表を前提とするものではありませんが、アーティストの日々の活動から生じた興味や疑問を追求するという性質上、彼らの創作の根源に向き合うことになるでしょう。リサーチの結果そのものだけでなく、プロジェクトを通じてアーティストが何を考え、今後の活動にどう繋げていくのか、彼らの挑戦にご期待ください。

奥村麻衣子(アートコーディネーター)



柳生 二千翔

柳生企画『ひたむきな星屑』 撮影：三浦雨林

劇作家・演出家の柳生二千翔は、プロジェクト「まばたきの季節」で、四季に合わせて一週間ずつ、計4回京都に滞在し、戯曲を執筆します。近年、演出家がいかに上演方法を想起できる「余白」のある戯曲に取り組む柳生ですが、今回の作品では、従来の戯曲の体裁や構成にとらわれず書きたいと話します。初回となる8月の滞在では、伝統芸能の鑑賞や、様々なジャンルのアーティストとの出会いを通じ、そこで目にするまばたきのような瞬間の時を戯曲に描くことを試みます。秋、冬、春の滞在では、先の滞りで執筆した戯曲のリーディングや座談会を行い、描き方を模索しながら戯曲の完成を目指します。

TOPIC 01

共同実験

Co-program
カテゴリーC

Co-programでは、カテゴリA(公演事業)・カテゴリB(展覧会事業)・カテゴリC(リサーチ、レクチャー、ワークショップ等)・カテゴリD(舞台芸術の分野で発表のみ支援)の4つの枠でアーティストからプランを募集し、京都芸術センターが提案者と共同で実施しています。カテゴリA・B・Dがそれぞれ作品の発表に重きを置いているのに対し、カテゴリCは、創作や発表を前提とせず、アーティスト自身の興味や問題に時間をかけて向き合うことで、創作活動における新たな視点や手法を探るプログラムです。今年度取り組む5組のアーティストとの「共同実験」をご紹介します。



増田美佳『乾いた部屋』 撮影：田添幹男

増田 美佳

増田美佳によるワークショップ「^{ミマカル}mimacul」では、公募で集まったメンバーで、書くことと身体に関するワークを行い、書く／読む／読まれることを経験しながら、それぞれの身体が持つ文を探ります。増田はダンサー、俳優として活動しながら、文筆家・嵯峨実果子としてコラムを連載するなど多彩な活動を展開し、言葉と身体の間を行き来しつつ双方から現在の身体のあり方を探求しています。身体表現をベースとする増田のナビゲーションによって、ただ書くだけでなく、個々の身体が紡ぐ文を探りながら、様々な角度から言葉へ手を伸ばしていきます。半年間のワークショップを経て、参加者との共著による小冊子の発行を目指します。



武田力 撮影：藤原ちから

武田 力

演出家・民俗芸能アーカイバーとして活動する武田の約5ヶ月にわたる「日常との憑依」のリサーチがスタートしました。街の人々の日常の振る舞いを「民俗芸能」のように捉え観察し、その振る舞いを意識的に演じることで、現代社会の見つめ直しを試みます。6月に実施したワークショップでは、ある集落に古くから伝わる民俗芸能が、日常の振る舞いからどう発展したと考えられるのかを紹介した後、参加者と共に京都の繁華街を歩く人々の振る舞いを観察しました。7月以降も時間や場所を変えて人々の振る舞いを探し、それらを自身の身体に取り入れて表現する段階へと進めていきます。

リサーチに向けて

その土地に生きる「知恵」が連続と何世代にもわたって重ねられてきた民俗芸能。その多くが社会構造の変化から継続困難な状況にあります。現代を生きるわたしたちに民俗芸能はもはや無用の長物なのでしょうか？ このプログラムでは現代にも伝わる民俗芸能の在り方をリサーチしながら、京都という都市に紐付いた「振る舞い」を民俗芸能と仮定して探します。その振る舞い／民俗芸能に意識を置くことは、現代の閉塞感から解放されるひとつの手段となるかもしれません。

武田力

武田力
「日常との憑依—振る舞いに隠された『わたしたち』—」
リサーチ&ワークショップ
日時：7月7日(土)13:00-15:00、16日(月・祝)10:30-12:30
会場：和室「明倫」
料金：無料
定員：10名(要事前申込)
※動きやすい服装でお越しください ※1回のみ参加も可
※イベント情報(P2)もご覧ください

その他のプロジェクトのリサーチ参加者募集情報は、
ウェブサイトで発表します。

主催：武田力、京都芸術センター

REVIEW

音楽

音楽史の失楽園より ～音と声の相聞を想う

F. アツミ

ムジークフェストなら2018
VIA AETERNA NARA～永遠の道～
『静寂～Le Silence』
5月9日(水)
唐招提寺 講堂前(奈良県奈良市)

音楽の概念はすでに解体され、いつか記された音、あるいは声は音響の綾へと放散しつつある。いま、音楽の歴史はどこに？ ルネ・マルタンを音楽監督に擁し、国内外の作曲家などとともに能と現代音楽の脱構築(再興)を図る能×現代音楽アーティストの青木涼子と弦楽四重奏団カルテット・エクセルシオを唐招提寺に迎えた、「ムジークフェストなら2018 VIA AETERNA NARA～永遠の道～」の公演『静寂～Le Silence』は、音楽史の現在の一端を示すプログラムとなった。講堂の弥勒如来坐像はどのように聴いただろう。

金堂を支えるエンタシスの円柱を想わせる調性、そこから分岐するヴァイオリン、ヴィオラ、チェロの旋律



撮影：ムジークフェストなら実行委員会

関西圏の公演・展覧会について、
若手レビュアーが月替りで執筆します。

は古代ケルトへと遡るイングランド民謡の面影を奏でる。弦楽四重奏曲《ファンタジー》(ハーバート・ハウエルズ/1917年)は、冷たい夜風を湛ませた残響とともに悠久の時空を感じさせる演奏となった。

ヴァイオリンの滑らかに滞留する放物線ではじまる《話と弦楽四重奏のためのハゴロモスイート》(馬場法子/2017年)は、謡曲《羽衣》から想起されるサウンド・スケープを描出したものだろうか。海辺の松風や衣擦れ、鼓や笛を模した弦の擦音が場内をそよ木々の葉音に折り重なるなか、金地に朱の三段水巻の舞扇を携えた青木涼子の明晰にして幽玄な謡/舞が浮かぶ。ヴィオラやチェロの緊張感のあるテヌートを地として、謡/舞のあやうくも緩慢な揺らぎに幻想的な冴えを感じた。

《夜の響き、山の中より》(ステファーン・ジェルヴァゾーニ/2016年)では、演者の声は透徹したシュプレヒ・ゲザング(語る歌)と謡の間を往還する。2本のヴァイオリンが弓なりに重なり描く掠れた持続音、ヴィオラに転写される声の旋律、その合間を褶曲しながら惑うチェロの低音域。強度のある弦の撥音は、頹落した語りと厳しく問いかける囁きの衝突を時に刻む。西行法師とともに、「みるもうし いかにかすべきわがこころ」と謡う声、あるいは音。月明かりに照らされた美と真理に懊悩する表現者のモノログを聴いた。

最後に、小説『クロイツェル・ソナタ』(レフトルストイ/1899年)に着想を得た《弦楽四重奏曲 第1番》(レオシュ・ヤナーチェク/1923年)。男女の諍いと狂躁をもって終える本作品では、疾走感のある分散和音を背景に、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロの旋律が幾重にも絡み合う。そこから、本プログラムに秘められた音と声、そして謡の物語を読みとる観客もいたことだろう。

2009年に京都賞を受賞したビエール・ブルーゼスは、『伝統音楽：失楽園？』(1967年)のなかでシュプレヒ・ゲザングとの類縁性から能への探究心を明らかにしていた。微分音の彫琢とアルゴリズムによる合成を経て、解析され、融合され、音楽史の失楽園を彷徨う音/声は、能とともにどのような音像をとるのだろう。青木涼子の謡/舞をとおして、音と声の相聞はいまも揺れているのかも知れない。儂くも光輝を放つ羽衣のように。

F. アツミ(Art-Phil) / 編集・批評 ● プレカリアートな日々、書くことの可能性について考えています。『想起の音楽 表現・記憶・コミュニティ』(アサダワタル著/水曜社)は音楽とコミュニティの現在を考えるうえで楽しみな一冊かと。http://www.art-phil.com

演劇

日常からもう少し先

楠海緒

dracom『模様曲』
5月22日(火)、23日(水)、30日(水)、31日(木)
OPA_Lab(大阪府摂津市)

創作という行為は日常の中でなされ、その結果生まれたものが舞台上に載せられる。一見当たり前のように聞こえるが、客席/舞台という枠組みでひたひた作品が上演されると、その当たり前が当たり前でなくなり、日常/非日常という枠組みが安易に想定される。上演内容の虚構度にかかわらず、「創作」というプロセスを踏み限り「作品」は日常から逃れることができない。しかし、dracom 演劇作品発表会「模様曲」は、そのような枠組みを超えた、新たな視座を私にもたらした。

「遅刻してきた人がいる場合、入口が一箇所しかないので目立ちますが、暖かく受け入れてください」。作演出の筒井潤による前説から、この作品は始まる。

白い壁を背に立っていた3人の俳優が舞台の中央に現れ、一人づつ台詞を紡ぎ始める。「ぼっかりと空いた穴」「目覚めの壁は鼻の先」「ひだまりにわかまり」。一つの台詞に一つの動きが割り当てられ、間を置きながら繰り出される。雑な言い方をすると一発ギャグの連発のようであるのだが、その一つ一つの台詞や動きから生まれるインパクトを重視しているわけではなさそうだ(勿論少しは考慮されているだろう)。現に、俳優の起こしたアクションが観客にとってアクションにならない状態(いわゆる「滑っている状態」)が続くのだが、どちらかというとその空気を味わうことが、ここで生まれる面白さへの歩み寄りであるように思えた。

一つの物語を3人の俳優で演じるのではなく、一人の俳優が一人の人物、一つのシチュエーションを担当し、演じる。それぞれの人物・シチュエーションは別個のものであり、上演が進んでも基本的には他の俳優のシチュエーションを侵食しない。それぞれの俳優が演じるシチュエーションは、仕事場や自宅など、今ここではない時間と場所であった。しかし彼らは一連の台詞と動きを繰り返す行為を



通じて、この「模様曲」という作品の枠組みの中で、同時にこの場所に存在し、互いに関係しあっていた。

しばらくすると、入り口の扉が開き、おもむろに人が入ってくる。カバンを下ろし、そのまますっくと舞台空間に馴染み、「飄々と参加」と言いながら他の3人の俳優と同質のパターンで演技を始める。この遅れてきた人物のみ、台詞によって紡がれる人物のシチュエーションと俳優の現在のシチュエーションが近く、役と俳優が同じ現在の時間を過ごしているように見えた。一人加わって4人になった俳優たちが、互いに関係したりしなかったりしながら、上演は進んでいく。

舞台は暗転し、俳優は礼をし、観客は拍手をしたが、遅れて入ってきた4人目の俳優の存在により、日常と舞台の境界がとてとても曖昧であるように思えた。勿論、ブラックボックスではないOPA_Labの部屋のような空間も作用する。舞台上にあるのは、明らかに日常の範囲を逸脱した人間の声・身体であるのだが、それが舞台の中の虚構に収まるのではなく、日常の中にある「そういうことをしている人たち」のようにみえてくる。非日常ではなく、日常の拡大と言えるようなその時間は、静かな滑稽さとともに、私の日常の中にも柔らかに続く。

(5月22日19:30の回を観劇)

くすのき みお / 俳優 ● 初めてまして。京都で演劇をしたり、映画を観たり、文章を書いたりしています。毎日暑くて日焼け止めがかかせません。
http://miokusunoki.tumblr.com/

美術

技法の現在進行形

— 絵画・陶芸・版画

清澤暁子

『ニュー・ミュレーション—変・進・深化』展
4月14日(土)～5月27日(日)
京都芸術センター ギャラリー北・南(京都市中京区)

本展は、加藤巧(1984年生)、西條茜(1989年生)、高畑紗依(1993年生)という20代から30代の若手作家を紹介した企画展である。いずれも関西の芸術系大学を卒業/修了または在籍し、活動する3人である。

ギャラリー南における加藤の作品群は、一見すると、水彩絵具による筆の運びとにじみを生かした色鮮やかなドロ잉である。しかし、例えば壁面の横長のパネルに描かれた《stroke #1、#2》を間近に見ると、色とりどりの点を微細な筆致で配置することで、遠目で水彩に見えた色面が見事に再現されていることに気づく。加藤が用いるのは卵テンペラという古典的な技法で、作品はいずれも、加藤自身の即興的な水彩ドロ잉を基に、その見え方を詳細に観察、分析しながら画面に再構成したものである。これを知るとき私たちの意識は、「描かれた意味内容」にとどまらず、視覚や色彩、また緻密な判断と作業の集積としての描く行為という、絵画の本質部分にまで向かう。

ギャラリー北では、床に置かれた巨大な脳みその形をした石の塊に目を奪われた。西條による《ルペルトの頭》。西條がオランダ滞在中に知ったヒエロニムス・ポスの絵画《愚者の石の切除》から紐解いた奇怪な脳手術の史実と、自身の体験を重ね合わせ、現地で拾い集めたという大量の石を、大胆に焼き固めた作品だ。作家の現地での思考

と行為、時間が、陶芸に独自の焼成という工程を経てまさに焼き固められ、リアリティをもって現前する。また、道具の佇まいを持ちながら用途のはっきりしない陶の作品など、その仕事は陶芸に対する問いを豊かに含んでいる。大学院で版画領域に在籍する高畑は、ギャラリー北に展示した《ビューポイント》で、街の道路や建築物、木々などのさまざまな風景の輪郭をトレースし、3色のカットティングシートに細かく切り出して、2つの壁面にわたり配置、再構成した。無数の風景の断片は、個別に私たちの記憶を照らしながら、壁から天井にまで拡散する。異なる視点を思わせる3色は、それぞれがレイヤーとなって重なり補い合うようにして、複雑に揺らぐ都市のイメージを浮かび上がらせる。都市を写し取る版画の手法を生かしつつ、インスタレーションとして空間に展開することで、私たちの身体感覚に訴えかける表現となっている。3人の作家は、絵画、陶芸、版画という異なる技法を用い、表現の起点もそれぞれだが、各技法の本質的な部分をとらえ、その根本を問うことから自らの表現手法を編み出し、ひいては表現分野の枠組みを広げていこ

うとする姿勢において共通している。愚直に自らの技法と向き合いながら、今後も手法を変化させ、問いを深化し、表現をさらに進化させていこうという3人による、現在進行形の勢いに満ちた展覧会だった。

きよさわ さとこ / 京阪電車なほ橋駅アートエリアB1事業担当 ● 第21回シドニー・ビエンナーレを初めて見に行きました。工夫された会場配置とストレスのない展示構成、なんと入場無料。国内芸術祭のフェスティバル感とは異なる落ち着いた佇まい。初のアジア人芸術監督に森美術館の片岡真実さん。



展示風景(ギャラリー北) 撮影：大島拓也

EVENT CALENDAR 7/1 ▶ 7/31

1 sun	2 mon	3 tue	4 wed	5 thu	6 fri	7 sat	8 sun	9 mon	10 tue	11 wed	12 thu	13 fri	14 sat	15 sun	16 mon	17 tue	18 wed	19 thu	20 fri	21 sat	22 sun	23 mon	24 tue	25 wed	26 thu	27 fri	28 sat	29 sun	30 mon	31 tue					
															[Tips]展 (6/1-7/16)																				

紙園祭に伴う開館時間変更のお知らせ
期間：7月14日(土)～16日(月・祝) 開館時間：10:00～17:00

TOPIC 02

KAC Performing Arts Program 2018 / Contemporary Dance フィリップ・ドゥクフレ ダンスワークショップ

KAC Performing Arts Program 2018/ Contemporary Dance では、フランスを代表するダンサー、振付家、演出家のフィリップ・ドゥクフレを招いてワークショップを開催します。

ダンスだけでなく現代サーカスやパントマイムのバックグラウンドを持つドゥクフレは、1983年にカンパニー「DCA」(Diversite:多様性 Camaraderie:友情 Agilite:身軽さ)を創設し、世界中で高い評価を得ています。1992年のアルペールビルオリンピックでは開会式・閉会式の演出を務め、サーカスとダンスを融合させたスタイルが話題を呼びました。映像作品の分野でも活躍しており、舞台作品においても複数のメディアを駆使したスペクタクルあふれる演出が特徴的です。

今回のワークショップでは、ダンサーとして活躍する方やダンサーを目指す方はもちろん、演劇や音楽の分野で活動する方々を対象に受講者を募集します。衣装や映像等の視覚的に捉えられる「動き」をダンスの面白さとして演出してきたドゥクフレによるワークショップを通して、さまざまな表現の可能性を探ります。

ジャンルを越えて舞台芸術の表現を革新してきたドゥクフレによるワークショップです。ダンサーやパフォーマーの皆さんにとって、スキルを磨き、ヒントや刺激を得られる場となるのではないのでしょうか。

當間芽(アートコーディネーター)

KAC Performing Arts Program 2018 / Contemporary Dance

フィリップ・ドゥクフレ ダンスワークショップ

日時：7月10日(火)～7月12日(木)
13:00～18:00

会場：講堂

講師：フィリップ・ドゥクフレ、ジュリアン・フェラン
ティ、ヴィオレット・ワンティ

料金：[3日連続]一般10,000円/学生8,000円
[1日単発]一般4,000円/学生3,000円

定員：30名

※3日連続受験の方優先
※応募多数の場合選考を行います

締切：7月1日(日)

申込：ウェブサイトからお申込みください

※イベント情報(P2)もご覧ください

「DCA」公演情報

フィリップ・ドゥクフレ/DCA

「新作短編集(2017) - Nouvelles Pieces Courtes」

・6月29日(金)～7月1日(日)

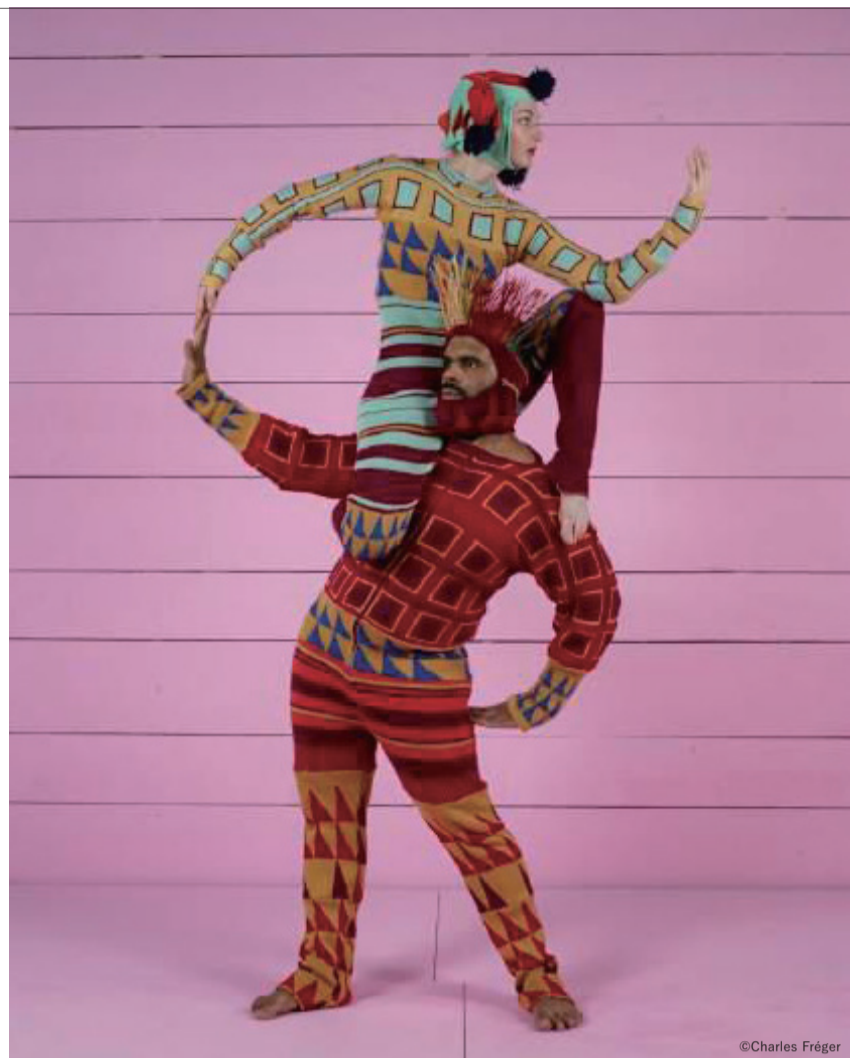
彩の国さいたま芸術劇場

・7月7日(土)、8日(日)

北九州芸術劇場

・7月14日(土)、15日(日)

滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール



©Charles Fréger

Profile

フィリップ・ドゥクフレ(Philippe Decoufle)

1961年パリ生まれ。ダンサー、振付家。ヌーボーシルク(現代サーカス)やコンテンポラリーダンス、パントマイムなどを基礎としたダンスや舞台芸術、パフォーマンスを創作。ニューヨークのマース・カニンガムのダンスカンパニーなどで活躍後、フランスに戻り、1983年、自分のダンスカンパニー「DCA」を設立。1992年のアルペールビルオリンピックでは開会式・閉会式の演出を担当し、衣装デザイナー・造形美術家のフィリップ・ギヨテル(Philippe Guillotel)と組んで、サーカスとダンスを融合させた幻想的な演出をしたことでも知られる。



TOPIC 03

京都文化カプロジェクト 2018 野外インスタレーション公募展 作品プラン募集



京都文化カプロジェクトは、2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会等を契機として、日本の文化首都・京都を舞台に行われる文化と芸術の祭典です。京都市、京都府、京都商工会議所が実行委員会を立ち上げ、2016年度から事業を開始しています。3年目となる今年度は「アーツアンドクラフツ」をテーマに、京都府下各所で、多彩な事業が展開されます。

この京都文化カプロジェクトの今年度のリーディング事業として、国内外のアーティストや建築家等から、野外に一時的に創出されるインスタレーション作品のプランを公募し、その中から選出したプランを、制作補助費500万円を提供し実現していただきます。都市における空間を大胆かつ想像力豊かに活用し、日常に楽しさと刺激を与える作品プランで、京都のまちの新しい魅力を創造しませんか。

〈審査員〉敬称略、順不同

安藤忠雄(建築家)

片岡真実(森美術館キュレーター)

建畠哲(京都芸術センター館長、多摩美術大学学長)

〈賞〉

・大賞 1点(制作補助費500万円、作品展示)

・入選 3点(賞金5万円、プラン展示)

〈応募期間〉

6月25日(月)～9月23日(日)(必着)

※持ち込み不可

〈会場見学〉

会場となる旧・京都府立総合資料館の見学会を開催します。

ご希望の方は事前にお申込みください。

両日とも14時から事務局スタッフが会場を案内します。

その後は、時間まで自由に見学していただけます。

日時：第1回 7月22日(日)14:00～16:00

第2回 8月20日(月)14:00～16:00

集合：旧京都府立総合資料館 東門前

(京都府京都市左京区下鴨半木町1-4) ※駐車場はありません

受付開始：6月25日(月)10:00～

申込：ウェブサイト申込フォーム、TEL、FAXで事前に京都芸術センターまでお申込みください。

〈展示〉

会期：2019年2月16日(土)～3月17日(日)(予定)

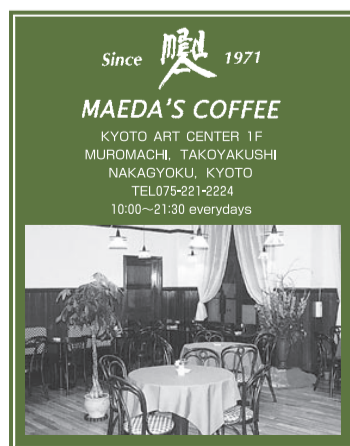
10:00～17:00 ※会期中無休

会場：旧京都府立総合資料館 前庭

主催：京都文化カプロジェクト実行委員会(京都府、京都市、京都商工会議所等)

企画・制作：京都芸術センター

※その他、応募の詳細は、京都文化カプロジェクトのウェブサイト(<http://culture-project.kyoto.jp/>)をご確認ください。



KYOTO ART CENTER 京都芸術センター



交通案内

○市営地下鉄烏丸線「四条」駅/
阪急京都線「烏丸」駅22番出口・24番出口より徒歩5分。
○市バス「四条烏丸」下車、徒歩5分。

開館時間

○ギャラリー・図書室・情報コーナー 10:00～20:00
談話室・チケット窓口 10:00～21:30
○カフェ 10:00～21:30
○制作室、事務室 10:00～22:00

休館日

12月28日から1月4日

〒604-8156

京都市中京区室町通蛸薬師下る山伏山町546-2

TEL : 075-213-1000 FAX : 075-213-1004

E-mail : info@kac.or.jp URL : <http://www.kac.or.jp/>

twitter : @kyoto_artcenter

facebook : <http://www.facebook.com/kyotoartcenter>

